〈追悼文〉

野村先生の思い出

日本医科大学スポーツ科学教室
三上俊夫

僕の中での野村先生はいつも穏やかで知的な紳士でした。野村先生の研究室に伺うと、いつでも部屋が整然としていて、いつもクラシックが流れていて、なんて自分とは違うのだろうといつも思っていました。

野村先生の退職記念講演を聞かせて頂いた時の感想は「もっと早くから、先生の研究されていた仕事を知っていたらよかったのに残念」でした。もっと早くから先生のお仕事について知っていれば、それについて色々と教えて頂けたのに。と言いながら、未だ先生の著書を読んでないのですが、必ず読みます、先生ごめんなさい。

野村先生から「三上さんは悩みがなさそうで良いね」とう発言を、確か3回ぐらいお聞きしました。その度に、「いやいや、私も悩みの一つや二つはありますよ」と思う反面、心理学者であり精神科の医師である野村先生がそうおっしゃるのだから、「実は自分には悩みがないのかもしれない」とも思い、気が楽になることがありました。実際、私の妻からも同様なことをよく言われますから、私は大した悩みは持ってないようです。

ある時、何かの申請書類について基礎科学主任の印鑑を頂きに野村先生の研究室室をお邪魔した時、私の書いた書類の内容を先生が読まれ、「三上さんは文章を書くのが上手だね」と褒めてくださったことがありました。大人になってから、人からそのようなことを言ってもらったことがなかったので、私は非常に嬉しく思ったことを記憶しています。でも、この文章を書いていて、私は書くのが上手でないと痛感していますが。

これからも、野村先生の思い出は、私の中で生き続けていきます